

平成 29 年度 日本獣医師会獣医学術賞の受賞者及び受賞研究業績

本年度の日本獣医師会獣医学術賞の選考は、「獣医学術奨励賞」は日本獣医師会雑誌の平成 27 年 8 月号（第 68 巻第 8 号）から平成 29 年 7 月号（第 70 巻第 7 号）に掲載された原著・短報を対象に、「獣医学術学会賞」は獣医学術学会年次大会（大分）において発表された地区学会会長賞の中から、「獣医学術功労賞」は推薦のあった永年の功労の業績の中から、選考委員会において厳正に審査され、平成 29 年度 日本獣医師会獣医学術学会年次大会（大分）における授与式において、本会蔵内会長から本賞（賞状）が、協賛会社（日本全薬工業㈱、共立製薬㈱、日本ハム㈱）から副賞（研究奨励金 20 万円（目録））がそれぞれ受賞者に授与された。

表彰された受賞者及び研究業績の一覧は次のとおり（「獣医学術学会賞」の口演要旨は 154 頁参照）。

平成 29 年度 日本獣医師会獣医学術賞受賞業績

【産業動物部門】

獣医学術奨励賞：

「北海道における牛パラインフルエンザウイルス 3 型の分子疫学的解析と迅速診断法の検討」

尾宇江康啓（北海道釧路家畜保健衛生所），他
 〈選考理由〉 本論文は、牛の重要な呼吸器病の病原体である牛パラインフルエンザ 3 型ウイルスについて、多数の症例を対象として検索を行い、新たなタイプである genotype C のウイルス浸潤状況を明らかにするとともに、特異的・高感度で実用的な鑑別診断技術を開発しており、本病の防疫上きわめて有用であることから、獣医学術奨励賞として推薦する。

獣医学術学会賞：

「ウマ顆粒膜細胞腫に対する AMH 診断基準値の設定」

村瀬晴崇（日本中央競馬会日高育成牧場），他
 〈選考理由〉 本研究は、繁殖性回復のために卵巣摘出手術が必要であることから確実な診断が求められ、最も一般的な卵巣腫瘍である馬の顆粒膜細胞腫（GCT）について、抗ミューラー管ホルモン（AMH）を指標として GCT 診断基準の設定を検討した。GCT 馬 25 例と擬 GCT 馬 42 例について、血中 AMH 濃度（ELISA 法）を測定した結果、GCT 診断において診断的意義の高い AMH は 4.7ng/ml であり、従来のインヒビン測定によりも優れた診断精度であることを初めて明らかにしたことから、獣医学術学会賞にふさわしい研究として推薦する。

獣医学術功労賞：

「家畜の繁殖効率向上に関する基礎及び応用的研究」

澤田 勉（大阪府立大学・名誉教授）
 〈選考理由〉 家畜の繁殖効率低下の原因解明と診断・治

療技術の向上は、産業動物獣医療における重要な課題である。澤田 勉氏が取組んできた家畜の繁殖効率向上に関する基礎及び応用的研究は、おもに「卵巣におけるステロイドホルモンの代謝に関する研究」と「家畜繁殖の人為的支配に関する研究」であり、その研究成果の多くは産業動物獣医学の振興に著しく寄与するとともに、繁殖障害の新しい診断・治療法の開発と普及に大きな貢献をもたらした。また、同氏は日本産業動物獣医学会獣医学術学会誌の編集委員長として同学会の運営に貢献され、獣医学術功労賞の授与がふさわしいと判断した。

【小動物部門】

獣医学術奨励賞：

「小型犬の頸部圧迫性脊髄症における動的病変の臨床学的特徴」

田中 宏（中山獣医科病院・奈良県），他
 〈選考理由〉 本論文は、小型犬において比較的多数の頸部圧迫性脊髄症の動的病変について 74 症例を用いて検討し、その臨床的な特徴を明らかにした。小型犬における本症の手術法を検討する際に重要な動的病変の特徴を取り入れた評価法を確立しており、きわめて優秀な論文であることから、獣医学術奨励賞として推薦する。

獣医学術学会賞：

「犬の副腎腫瘍の鑑別診断における造影超音波検査の有用性」

南雲隆弘（日本大学），他
 〈選考理由〉 本研究は、超音波診断用造影剤であるソナゾイドを用いた造影超音波検査で、皮質由来と髄質由来の副腎腫瘍の鑑別を試みたものである。髄質由来の腫瘍である褐色細胞腫では急速に造影効果が増強し急速に減少したのに対し、皮質由来の腫瘍では造影の減

少速度が緩徐であることを明らかにした。この結果は、犬の副腎腫瘍に対する外科的アプローチに際し、術前にきわめて有用な臨床的情報を提供することにつながることから、獣医学術学会賞にふさわしい研究として推薦する。

獣医学術功労賞：

「犬の心エコー図に関する基礎的・臨床的研究」

山田英一（山田動物クリニック・病院長）

〈選考理由〉 山田英一氏は、犬の心エコー図の描出に関して、被検査犬のポジショニング、超音波プローブの位置など最適な検査技術を提唱し、その検査法は現在に到るまで犬の心エコー図検査の基礎となって臨床応用されている。また、僧帽弁閉鎖不全症や犬の心筋症などの診断についても心エコー図検査法を積極的に取り入れ、その臨床普及に貢献した。さらに、日本獣医師会の獣医学術振興にかかわる各種委員会委員や日本小動物獣医学会の幹事、副学会長を務められ、小動物獣医学の発展に貢献されたことから、同氏への獣医学術功労賞の授与はふさわしいと判断した。

【公衆衛生部門】

獣医学術奨励賞：

「豚筋肉及び腎臓におけるガラスビーズを用いた動物用医薬品迅速一斉分析法」

中郡昭人（秋田県食肉衛生検査所）

〈選考理由〉 本論文はアセトニトリルとガラスビーズを用い豚筋肉・腎臓からそれぞれ44種類、42種類の動物用医薬品を一斉に抽出し、LC/MSで分析可能としたものである。これまで多大な労力と時間がかかっていた多くの動物医薬品の分析を、簡便かつ迅速に分析可能とした点は、食肉衛生並びに公衆衛生上、きわめ

て有用であると判断されたので、本論文を獣医学術奨励賞に推薦する。

獣医学術学会賞：

「牛枝肉の冷却工程における管理基準（CL）の設定—冷却曲線と多変量解析—」

葛岡功弥子（豊橋市食肉衛生検査所）、他

〈選考理由〉 本研究は、これまで経験的・感覚的に冷却室内に枝肉を配置して行われていたと畜後の牛枝肉の冷却について検討したものである。冷却室の5カ所に配置した牛枝肉の表面及び深部の温度変化を経時的に測定することで、統計的に作成した冷却曲線から牛枝肉の冷却工程における管理基準を設定したことは高く評価できた。また、研究発表のまとめ方が優れており、今後のと畜場のHACCP導入に向けて応用可能な内容であったことから、獣医学術学会賞にふさわしい研究として推薦する。

獣医学術功労賞：

「獣医公衆衛生学分野における動物の免疫分子と系統に関する遺伝子研究」

石黒直隆（岐阜大学・名誉教授）

〈選考理由〉 石黒直隆氏は、獣医公衆衛生学分野にいち早く分子生物学的手法を導入し、牛免疫機構の解明や動物プリオン病とアミロイド症に関する先駆的な研究を行うとともに、家畜と野生動物の系統を遺伝子レベルで解析し、野生動物保護・環境保全の分野にも多大な貢献をした。また、同氏は、平成18～21年まで日本獣医公衆衛生学会の副学会長を、平成22～26年は同学会長を務め、日本獣医師会の運営並びに日本獣医公衆衛生学会の発展に尽力した。以上から、石黒氏は獣医学術功労賞を授与されるにふさわしいと判断した。



左から、
村瀬晴崇氏、南雲隆弘氏
田中 宏氏、澤田 勉氏
小倉憲夫氏（日本全業工業(株) 専務取締役 営業本部長）
藏内勇夫氏（(公社)日本獣医師会会長）
岩ヶ谷浩章氏（共立製薬(株) 執行役員 CA営業本部長）
村上 博氏（日本ハム(株) 品質保証部 安全試験室長）
中郡昭人氏、石黒直隆氏
山田英一氏、葛岡功弥子氏
尾宇江康啓氏